

II. 「21世紀へのパラダイムシフト」

記念行事のメインとも言える記念シンポジウムは7月1日2日の両日にわたり開催された。「21世紀へのパラダイムシフト」と題されたこのシンポジウムは学問論、大学論の二部構成で行われた。このシンポジウムを通して、学問におけるパラダイムの組み替えの必然性と高等教育における大きな変革の意義について問い直すといった狙いが提示されていた。

この狙いがどこまで達成できたかは参加者各自異なった思いがあるだろうが、後日出版が予定されている報告書などをも見た上で再度、自分自身に問い直してみる必要があるであろう。

第1部：学問論『学問にとって総合性とは何か』

基調報告：木下富雄（社会心理学、摂南大学経営情報学部教授、
京都大学総合人間学部前学部長）

パネリスト：木下富雄、野家啓一（科学哲学、東北大学文学部教授）、
村上陽一郎（科学史、東京大学先端技術センター長）、
米沢富美子（理論物理学、慶応義塾大学理工学部教授）

コーディネーター：金田晋（比較美学、広島大学総合科学部教授）

第2部：大学論『新構想学部理念・現実・課題』

基調報告：蓮實重彦（表象文化論、東京大学教養学部長）

パネリスト：児嶋眞平（有機合成化学、京都大学総合人間学部長）、
丸山幸彦（日本庄園史、徳島大学総合科学部長）、
村上陽一郎（前掲）

コーディネーター：渡部三雄（統計物理学、広島大学総合科学部長）



① 1日目 右から米沢富美子氏、村上陽一郎氏、
木下富雄氏、野家啓一氏、金田晋氏

② 2日目 右から村上陽一郎氏、丸山幸彦氏、
児嶋眞平氏、渡部三雄氏



答えは自分で探し求めるしかない

成定 薫（人間文化コース教授）

筆者はシンポジウム実行委員会のメンバーの1人として、今回の総合科学部創立20周年記念シンポジウムに深く関わった。シンポジウムの準備を進める過程で、実行委員会の最も重要な課題の一つがシンポジウムのテーマを設定することであった。おかげさ言え、どのようなテーマを掲げるかに総合科学部20年の実績が問われるのではないと思われたからである。実行委員会で何回か議論を重ね、ようやく「21世紀へのパラダイムシフト—転換期の大学と学問—」という全体テーマと、第1部「学問にとって総合性とは何か」、第2部「新構想学部の理念・現実・課題」というサブテーマが決定された。



右から木下氏、野家氏、金田氏

特に、第1部「学問にとって総合性とは何か」については、「何を今更」といった批判がありうるかもしれない。しかし、たとえ稚拙なようであっても、このテーマについての突っ込んだ議論を回避することはできない、と我々実行委員会は考えた。すなわち「学問にとって総合性とは何か」を正面切って問うことを通じて、これまでの20年の研究・教育の実践を顧みるための規準を確認すると同時に、今後総合科学部が目指すべき方向を見い出そうと考えたのである。さらに言えば、「学問にとって総合性とは何か」という問いは、昨今の大学と学問をめぐる状況の中で、表層的なスローガンとしてはともかく、真摯な問いとしてはややもすれば敬遠されがちであり、とりわけ、「総合科学」を看板として



木下富雄氏

いる我が学部でそうではないか、といった危機感ないし問題意識が実行委員会にはあったのである。

7月1日のシンポジウム第1部では、木下富雄氏が京都大学総合人間学部創設

に関わった経験を踏まえて、個別科学と総合科学との関係について生真面目な論議を提起した。この基調報告を受けて、野家啓一氏は「総合科学」を「統一科学」と読みかえることによって自然科学と人文・社会科学の関係に関する斬新な議論を展開し、村上陽一郎氏は現代科学に特徴的な社会学的構造の分析を通じて、そこから抜け落ちてきたもの、見えなくなってしまうものを「回復する視点としての総合」を論じた。最後に米沢富美子氏は要素還元主義では取り扱うことのできない「複雑系の科学」に物理学の新たな展開の可能性を展望してみせた。

総合科学部が20年かけて未だ答えを見いだせないでいるテーマ「学問にとって総合性とは何か」に3時間で決着がつかずもなく、

パネル討論会は「いよいよこれから本題」といったところで時間がきてしまった。しかし、そもそもこのテーマは誰かに解答を教えてもらうといった類のものではなかろう。各自がそれぞれの研究・教育や勉学の過程で絶えず問い直し、自分なりの答えを探し求めるしかないのである。そして、このシンポジウムでの議論は、解答は与えてくれなかったかもしれないが、考えるためのヒントに満ちていたと言えるだろう。



村上陽一郎氏

新構想学部の現状とその課題

生和秀敏（生体行動科学コース教授）

蓮實重彦氏は、未来における大学をより確かなものへ変えるためには、空疎に流れやすい理念論議より、これまで大学が果たしてきた、また、現に果たそうとしている機能を把握し、機能と効用の範囲を広げる努力こそ肝要だと指摘している。彼はそのうえで、様々な差異や矛盾を乗り越えようとする試みを、社会的要請や義務としてではなく、大学人の権利として意識化し、それを共有可能な意志的連帯にまで高める必要があると述べ、そのためには、境界線の設定によって生み出された閉鎖性をいわば濃淡の違いとして受け止める柔軟性と異なった領域から発信されるものに対する感性を磨き、戦う学部として姿勢を鮮明にしなければならないと主張している。



児嶋眞平氏

児嶋眞平氏は、教養部の廃止に伴う京都大学総合人間学部の創設を「高度一般学部への挑戦」として位置づけ、従来の教養科目や専門基礎科目、外国語科目、保健体育科目に加え、人間学科・国際文化学科・基礎科学科・自然環境学科から構成されている総合人間学部の学部専門科目のうちの半数以上を全学共通科目として開放している点を強調している。また、人間と環境との総合的把握を学部創設理念として掲げる以上、異なった領域に対する興味と関心の育成は必要であり、その制度的条件として副専攻制度の導入に踏み切ったと述べている。

丸山幸彦氏は、人間文化と自然システムの2学科から構成されている徳島大学総合科学部においては、今なお専門性と総合性の関わりについて試行的な変革と模索の時代が続い



丸山幸彦氏

ていることを率直に述べている。これは、総合科学部の設置が、確固とした創設理念に基づいて行われたというより、教員養成学部と教養部との改組合体という組織面での整備計画が先行したためであり、多くの新構想学部が抱えている共通の課題であるといえる。

村上陽一郎氏は、「卒業の時、どんな学生であってほしいか」という具体的な問を自らに対して発し、狭い専門領域の専門家を育てるのではなく、判断力、洞察力、批判力、行動力を備えている人材の育成こそ重要であり、そのためには、できあがったジャーゴンを駆使する専門性の修得に加え、既存のものをリシャッフルし、全体の中で自らを捉え直す多角的な視野と感性を身につけさせることが新構想学部の役割であると主張している。

渡部三雄氏は、広島大学総合科学部が設立当初より1学科制を採用し、教育組織としてコース制を導入してきたのは、それが学際領域の活性化を促し、学問の進歩に柔軟に対応できる体制だと考えたからであると述べている。また、設置基準の大綱化を期に、一般教育・専門教育という枠を乗り越えるための新しい区分法を全学に提案し、総合科学部開設の全授業を全学に開放するという方針をいち早く固めたのは、組織や意識の硬化化が進みがちな大学に新しい時代の風を吹き込み、広島大学を真に有機的な総合体として機能させたいという願いからであったからだとして述べている。

しかし、その願いとは裏腹に、異なった領域に対する感性は次第に鈍り、変化を忌避する風潮が蔓延しつつあることも事実である。総合科学部が複数領域の混在という枠を乗り越え、自他ともに誇るべき総合研究・学際研究を推進し、その成果を質の高い教養的教育へと昇華させるためには、既存の枠を越えた分野横断的な研究・教育プロジェクトを募り、思い切ったパラダイムシフトにチャレンジすることがいま最も必要なことであろう。

シンポジウム二日目の感想にかえて

長坂 鈴（地域文化コース4年）

一日目の学問論に続いて、二日目は大学論が展開された。基調報告で蓮実氏は、大学改革における主体は誰か、たとえ義務からの改革であっても、態度だけでも権利を装ってはどうかということと言われた。また学生の存在を前面に出され、大学は様々な形で学生と闘争をしなくてはならないのではないか、と提起された。

しかし次からのパネル討論では、改革は義務であり、学生の存在はあまり関係なく、闘争するなんて思いつきもしないという様子が表れてしまった気がする。学部のカリキュラムについての話でほとんどの時間が過ぎてしまった。それらの話を聞いていて、総科も年をとったのだという気がした。

入学した頃は、総合科学部にとても夢を持っていた。接する先生方も、熱を持って語られる方々がいらっした。学年が進むにつれて、大学院にゆくための勉強になった。確かに専門的なことは積み上げて行かなくてはならないし、細く狭い専門という門をくぐり抜けて、努力の果てに世界という舞台が広が

ているのかもしれない。そこに行くということは、大変困難なことでもあるけれど、とてもエキサイティングで素敵なことなのだろう。

しかし学部生皆が大学院に進むわけではない。四年で卒業してサラリーマンになる人も



米沢富美子氏

多い。そうした人達に対する、最初に掲げていたゼネラリストを育てる学部という方向を忘れてはいるだろうか？学生も総科に風通しの良さを期待していたこ

とを忘れ、あきらめてしまっていないだろうか？ともあれ20周年記念。新構想学部の先輩としてその課題を提示しそれへの取り組みを語る、とまではいかないにしてもせめて、これまでの苦労話や夢を語ってもよかったのではないか。ここで自画自賛しても仕方がないかもしれないが、制度の説明で終わってしまったのはもったいない気がした。

死に行く学部へ —総合科学部を愛する者として—

大村 尚（生物圏科学研究科博士課程前期2年）

総合科学部の歴史は、「欺瞞」の歴史である。20年もの間、我が学部は総合性、学際性という魅惑的な理念を提唱し、多くの人々を迎え入れてきた。我々は、各専門分野が協力しながら共存し、既存の細分化された枠組みでは捕らえられない諸問題を解決していくという論理和としての総合科学を目指したはずであった。しかし、看板に偽り有り。内部にコース、系という細分化された小集団を生み、研究室単位で孤立系の中間領域を開拓していかうとする現実を目の当たりにした人々は、一体何を思った事であろう。半ば形骸化した

理念を引きずり続け、自己矛盾と戦い続ける我々の歴史は、総合科学を志して訪れた多くの人々、社会を欺き続けた歴史でもある。20年間の罪は決して軽いものではない。

総合科学部の歴史は、「停滞」の歴史である。旧教養部の移行という、非自然発生的な誕生から20年、理念は一向に実現されぬまま、組織という肉体だけが肥大化し、細分化していった。総合を内包した自己完結型個別学の台頭により、組織は総合性を追求するための共通の目的関数を見失い、研究室毎に目的関数の異なる個別学の集合体に生まれ変わった

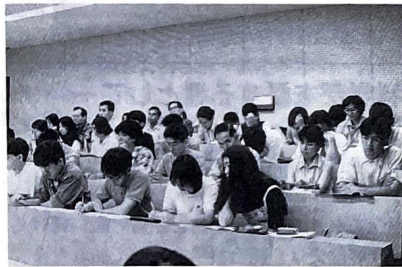
のだ。教育システムとしてのコース制度は、個別学の類似性による集合形態を如実に反映し、その目的関数は専門教育の効率化にシフトしつつある。我々は理念に総合学を掲げながら、相互作用の小さな個別学の集合体としての組織を創り上げ、20年間疑似総合学という姿に停滞し続けている。我々の肉体は未だ教養部のままであり、徐々にその魂まで失われつつある。

大学院重点化構想、教養教育の衰退、既存学部への中間領域の浸透という環境変化に伴い、21世紀へ向けて取るべき選択肢は1つしかない。それは、今一度理念を再確認し、その方法論を確立していくことに他ならない。硬直化した現組織を「～についての総合性」という目的関数を明確にした柔軟な組織へ組

替え、個別学の個性を保ちながら有機的にリンクさせる総合学を具現化していくことである。幸いにも、現組織には個別学の多様性が保持されている。諸領域から現実の多面性や総合における学問的位置付けを認識し、パラダイムシフトしていく可能性を我々はまだ失っていない。理念の否定は内部崩壊による組織の突然死を意味し、理念の忙殺は大学改革という自然淘汰による組織のゆるやかな死を意味する。自らのアイデンティティーが揺らぎ死を迎えつつある学部を救うには、痛みを覚悟しても理念を守り抜く強い意志を必要としている。総合科学部を愛する者として、私は学部の死など見たくない。組織は人なり。スタッフの英断に期待したい。

III. あなたは総科を壊せますか？

7月2日、20周年行事の最後となる、シンポジウムが終わった。一連の行事に参加してきた者として、心に引っかかるしこりのようなものを感じている。



シンポジウム会場

パラダイムシフトの必要性は十分感じられたし、新構想学部の抱える問題点もある程度浮き彫りになってきたと思う。京都大の「総合人間学部」や徳島大の「総合科学部」が提示した問題は一朝一夕に解決できるものではなく、十分に時間をかけて考えなければならない問題である。曰く「総合性と専門性の関係」、曰く「教養科目と専門科目の一体性」、曰く「教官の負担増」等々。

しかし今回浮き出てきた問題点は、すでに総科創立の時から繰り返し言われてきたことではないのか。総科はこの20年間これらの問題に正面から取り組んでいったのではなかったのか。確かにこれらの問題は、正確にいうならば、決して解決されないであろう問題だと思う。だが、それに正面から取り組み、もがき、のたうち回りながら、この日を迎えたのではなかったのか。20年の重みを感じさせる何か、この“あがき”の中から醸し出されてきたのではなかったのか。この“何か”が全くと言っていいほど感じられなかった。一体総科の20年は何だったのだろうか。

“新しい酒は新しい皮袋にいれよ”という言葉がある。旧弊に邪魔されない、真に新しいものを求めての言葉と解釈できる。翻って我が総科はどうだろうか。“学問の総合化”といった理念を、実現するために造られたという側面は確かにあろう。このことは創設当時の方々の文章にも表れている。しかし、そ

の一面で社会の波に洗われた結果であり、専門の学生がほしいといった、旧教養部教官のエゴに似たものがあつたことも、否定できないのではないかと。言い替えば総科には“新しい皮袋を作りました。さあ酒をいれましょう”的な動きがあつたのではないかと。確かに新しい酒はいれられた。しかし同時に古い酒も大量にいれられたのではないかと。古い酒と新しい酒の混じり合いから、新しい何かが出来てきたのだろうか。「内実はこれから自分たちの手で自ら造」ってきたのだろうか。

新しい物を作り出すときのエネルギーは、たとえ母胎があつたとしても、並大抵のものでない事は想像に難くない。事実記録に表れている今堀学部長の熱意や当時の教職員の苦労は筆舌に尽くし難いことであつたと思われる。このエネルギーは設立後も継続され、そのいくつかは形となつていった。各種セミナー、研究会など現在にまで継続し、数々の成果を上げている。と同時に成果が上がれば上がるほど、そのセミナーなり、研究会なりは己のフレームを築き上げていっているのではないだろうか。

自己のフレームを作り上げ、一つのパラダイムを作り上げる事は、当然なされるべき事である。しかし、真に総合科学を目指すなら、できあがつたフレームを壊していく動きも必要なのではないかと。創設当初のセミナーや研究会は、それまでのフレームを壊す動きと共に作り出されていった。作られたものが硬直

化し、一つのパラダイムを形成する事は自明である。果たして、今再びこのフレームを破壊しようという意識が、総科構成員の中にどれほど持たれているのだろうか。

20年前に掲げられた理念を今もなお保ち続けているのなら、絶え間ない変化の提示を行ってきているはずである。常に創造と、破壊を繰り返し、自らの住まう領域を自らの手で壊しつつ、新しいものを創造する。これをおこなっていくのが総科ではなかったのか。

今現在の総科はどうであろうか。

学生諸君、今ある総科のまとまりを壊せませうか。

職員の方、今ある職場を否定する事が出来ますか。

教官の方々、己の領域を解体し、個として動く事が出来ますか。

そして、学部長、破壊と創造の学部である総合科学部の顔として、在る事が出来ますか。

過去20年間築いてきた実績に拘泥する事なく、それらを破壊する事によって今一度創設の理念に立ち戻る必要が在るのではないかと。

あなたは総科を壊せますか？

(学生編集委員：八木茂樹)



旧総合科学部玄関



広大のシンボル東千田キャンパスのフェニックス



現在の総合科学部玄関

【学生の生の声 密室シンポジウム】

—私は座談会にでた—

進行 田中裕子(物質生命科学コース2年)
 出席者 荒巻幸子(社会科学コース3年) 八木茂樹(人間文化コース3年)
 清水明美(社会科学コース3年) 榊原恵子(自然環境研究コース3年)
 吉田宣幸(自然環境研究コース3年) 篠崎暉平(地域文化コース2年)
 谷淵茂樹(外国語コース2年) 松岡麗子(生体行動科学コース2年)
 三浦素子(社会科学コース2年) 池田みち子(社会科学コース2年)
 藤原里子(社会科学コース2年) 長谷川誠之(1年) 小野ゆかり(1年)
 小椋聡子(1年) 藤原友晴(1年) 前田賢一郎(1年)
 /早瀬光司(飛翔編集長)



座談会風景

はじめに

今回の企画の目的はと問われると我々編集委員にとって非常に答えにくいものがある。あえて言うならば、学生の生の声をこの公の場、つまり飛翔に載せてみたいということだろう。飛翔は学生・教官・事務官が協力して編集している総合科学部の広報誌である。今回はその学生にスポットをあててみた。また、意見交流という面を重視して、今回は座談会形式を採用した。以下はその報告である。

●授業について●

田中：最近授業にきてる人が減ったね。

松岡：授業とかさばるっていうのは、学生側からすれば授業に魅力がないってことにもなるよね。あ、これはよい授業を要求する権利になるんだけど。

池田：よい授業って言ってもね、この前、教授と話したんだけど、ある科目を教える先生がいなかったら、少しでもその内容をかじっている先生に教えさせるんだって。だから、教えてる本人だって面白くないのに、生徒にとって面白いわけがない。英語とかそうらしいよ、英語なら先生はみんなそこそこできるから、全然専門でもないのにやらされたりするみたいで。



田中：それは工夫次第だと思ふな。英語だったらその人の専門についての英語をやるとか。

藤原(友)：学生は良い授業を要求する権利があるということになると、先生は良い授業をする義務があるということに言い替えられますよね。やりたくない講義をやらされたり、論文は書けるけど話すのは下手とか、そういう、講義を苦手とする先生もいらっしやるのだけれど、良い授業をする義務というのは…

田中：それは先生が話すだけの一方通行の授業だからで、ディスカッション形式の、学生の参加する授業ならもっと違うのでは。

藤原(友)：でも外国みたいにはいかないじゃないですか。人数が多いし。大講義室みたいな所を使ってるくらいだから。

田中：人数が多いというのはかなり非常識という意見があるんだよね。日本の大学が批判される時にこのことが挙げられているんだけど、この形態はおかしいのではないかと、みんなで考えたら良い方向に向かうのではないか。

●自主性を重視した授業選択を●

田中：授業選択については、どうですか。

篠崎：英語って何やってるかわからないじゃない。僕はあれって必修じゃなくてもいいと思うけどな。

みんな：(笑)

谷淵：それは篠崎君の個人的な意見でしょう。

長谷川：必要だっていうのは分かるんだけど、何故必要なかわからない。

篠崎：学生側にも問題があるんじゃないのかな。

谷淵：英語はやっぱ必要だと思う。理系の人も論文を読んだりするのに必要だし。

篠崎：でも、先生を決められてるのはさー。

田中：でも、すべてを自由にしてしまうと、必ず大学生は遊ぶんじゃないかっていう意見が出て来るよね。まあ、そういう人は大学に来る意味がないんじゃないかなって思うけど。遊ぶために大学に来るんだったら、大学っていうものを、完全に間違っってとってるし。

松岡：でも、ある程度、与えなければ出来ないこともあると思うけど、みんな大学に来てるんだから子供じゃないし…

田中：大学までエスカレーター式に上がってきてる感じがあって、何で勉強するのかがよく分からなくてもまあとあえず大学にきたって人が多い御時世だから。

松岡：だから最初に、これはあとからついてくることなんだけど、これをやりたいためには、こんな勉強が必要なんだよってことを示してくれないと、あまりに最初からその所を締め付けすぎて…

篠崎：でも、必修はいらないけど、指導は絶対必要だと思う。

荒巻：わたしはね、自分が何かやって、自分が積極的に参加するっていう授業がいいと思うんですけど、そのへんで大学に入ってから、「あれっ？」って思った部分がありますね。あ、ひとつ聞きたいんですけど自然環境コースに行きたいと思っていて、初めそちらに合わせて単位を取っていて、後で社会学にいくってことはできないでしょうか？

榊原：実際には難しいと思います。コースに行くまではいいけど、コースに入ってから大変だと思うんですよ。

前田：ほう、ぼくは生体行動の話聞いてみたいですね。生体って一番面白そうだから。みんな、聞くと生体か自然環ですからね。でも、だいたい微積とかが、社会に出て役に立つんですか？なんのためにやるんでしょう。

長谷川：僕らが知らんだけで役に立つんじゃない。僕は役に立つんだろと思ってやってるけどね。

八木：哲学とかにもでてくるよ。

三浦：経済でもつかうし。

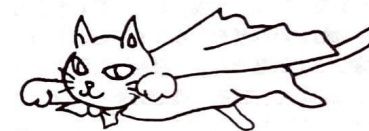
榊原：自然環でもつかいますよ。

松岡：だから1年生には、自分の取ってる科目のつながりがわからなくて、ただこれがいいよっていう情報だけで授業を取るっていうのがあると思うんで、そここのところの改善だと思います。また、一人一人のやる気とかっていう問題は広くなり過ぎてしまって、個人差もあるし、手がつけられないことなんですけど。

長谷川：一般教養みたいな基礎的な科目と専門分野のつながりがすごく曖昧というか、よくわからないので、やってる側も無意味に取ってしまうというのがありますよね。つながりがもっと明確になって、「これはこうこういう事のもっと概論的なことですよ」とかわかると、もっと楽に授業選択ができるんですけど。

前田：だから、そういう将来役に立つような事を飛翔にのせれば、1年生もそれを見て、どう役に立つかが分かって、勉強にも身が入りますよね。

長谷川：そういうのは、聴講手続きの前に欲しかった情報ですね。



●聴講期間について●

松岡：聴講期間っていうのが名前を記入するだけの期間になってしまっていて、やる気があったとしても、例えば取りたい授業が重なったとしたとして、今のままで、自分の想像と違う授業を取ってしまうこともありうる。だから、紙をまわすのは、講義ガイダンスをやってしまっただけからにすれば？

三浦：それにやっぱり、先生の労力を少し割いてもらって別にガイダンスみたいな場を設けるとか、講義内容についてのプリントをつくるのかして欲しい。

長谷川：聴講期間っていうのに工夫がなさすぎる。1週目はただ名前を書いて、2週目に授業受けてもし面白くなって名前を消したとしても、次の授業を聴講する機会もなくて、適当になにかの講義を取るようになってしまう。聴講期間は建前だけっていう部分がありますよね。



●コースガイダンスについて●

清水：04生まで沼田合宿と言うのがあったんですよ。あれはとても良かったですよ、どうしてなくなったのかな？

小野：沼田合宿について、廃止に賛成側の先輩から聞いてみたのですが、コースの説明を聞けると言っても3つくらいしか聞けなくて、夜に話を聞くといいも遊びが優先してしまう場合が多くて、わざわざ合宿という形をとらなくても、という感じですか？それに、事前に質問を取っておくので当日その場であまり活発に学生側が質問をしないうらいんですよ。コース別ガイダンスもなかなか良かったとい

う声もあるらしいし。

谷淵：そういえば、僕たち05生は、コースガイダンスを2回しか受けてないです。これは少なかったような気がします。回数を増やせば、その効果はもっと上がると思います。

清水：私は自分が実際に動いたせいもあって、沼田合宿は結構良かったと思うんですけど。夜は確かに先生方は飲んでいただけ。自分の希望のコースの先輩と話をしようと思えば話を聞くことが出来て、コース選択について迷っている場合とかは詳しく話を聞くことができるし、事前に質問取ったのも、同じ様な質問が何度も出されるのを防ぐのと、予めどんな質問が出るか分かっていることで答える準備が出来たっていうのがあります。でも確かに合宿はお金がかかるんですよね。

神原：合宿のいいところっていうのは、同じコース志望の人と仲良くなるっていうのがあると思うんです。同じ授業を取ってても、なかなか知り合いにはなりにくいけど、合宿で知り合いになってしまえば授業の情報交換もできるし、一緒に頑張ろうみたいなものも生まれてくるんではないかと思うんです。ガイダンスだったら、話聞いてはい終わり、という感じで情報交換ができないですよね。あとコースが違ってても、興味があるところで共通点があれば、「じゃあ一緒に勉強しよう」ってこともできますよね。

●学生生活について●

田中：ちょっと話しは変わるけど、最近食堂の行列がすごくない？

松岡：一般教養受ける人は、だいたい総科の食堂で食べてるから。文学部も移転してきたし学内の食堂じゃ無理なのは？学校の周りに店はないし、千田だったらすぐ近くに店があるから…。やっぱり、周りの環境がついていってないのでは。

小椋：ごみ箱もすごいですねえ。

松岡：山積みになってるよねえ。

田中：学生のモラルの問題と、それからごみ箱が小さいんだと思う。

藤原(里)：大学の教室や、スペイン広場の階段とかもすごく汚いね。教室だと、紙のちらしとか。びんとか缶とか置きっぱなしでしょ、一歩外に出れば捨てられるのに、そういうのはやめてほしい。

松岡：ごみ箱を増やせて言う権利があるのだけれど、そしたら学生はモラルを守ってるのかというものがあわけだから。

田中：ちょっと気になってたのが、個人とかサークルとかで教室が非常に取りにくくなった事。教室取ろうと思ったら、5月までに申請しなければならぬみたい。いつ結成したのかとか、名前や住所、内容まで書かないといけなくなって、相当厳しくなったの。

松岡：制度が変わっていても、実際、学生には何が変わったのかわかりにくいから、改革が起こっても学校と学生のコミュニケーションがとれてないなって思う。あと、サークルの話で思い出したのだけれど、総科テニスの部長さんが「コートがとりにくい」って言ってたんですよ。何でかって言うと、1つのサークルが何週間も独占してね、それがとても不平等って思うんですよ。

田中：そういうのはどうしたらいいのか、もっと施設を増やすとか。

池田：だから、場所を決めればいいのかね。体育会系はこことか、他にもちょっと簡単なグラウンドみたいなのがあって、ちょっとやりたい人はみんなここ、とかね。



●学費について●

池田：ところで学費が高いと思わない。

前田：そうですか？ 実感無いですけど。

藤原(里)：いや、高いと思うよ。初年度納付金が60万円ぐらいかかっているよ。

前田：何でそんなに高いんですかね。

三浦：私立の大学とかなり近づいているみたい。

田中：教育は受ける者が費用を払うという考え方で、学費が値上げされてるって聞いたことがある。

池田：私立の大学との差を縮めるためじゃないの？ 私立の学費を引き下げればいいのか。

田中：家賃も高いしお金かかって親に申し訳ないわあ。イギリス・ドイツでは個人負担ゼロだっていうのに。

●総合科学とは●

長谷川：総合科学部の学生がすべきことっていったい何なんですか？

神原：他の分野の知識を身につけてその上で総合的な研究を続けていってほしいんですけど、実際に学生のやっていることは、どれもこれもつまみ食い、体系だてて勉強しているわけではない。だから、知識であって、それは、学問ではない。

田中：知識であって学問ではないっていうのはドキッときた。

早瀬：僕の個人的意見は、大学っていうのはやっぱり何か新しいことを学ぶところだと思う。その意味では、高校までは人の知識を一所懸命勉強してきて、大学3年までは既存の知識を身につけなければならない。4年生になって初めて全く未知の分野をやれる。大学っていうのは未知の分野をやるところだから、僕なんかは、1年生から卒論やったらいいと思う。未知の分野をやったら面白いね。もちろん、今、君達はまだまだできないけど、きっとみんなそれぞれ勉強したいことがあると思うんだよね。そうしたら、強制しな

くてもみんな自ら勉強していくと思う。本当の大学ってそうじゃないかな。大学院ってのは完全に未知の分野をやる所だからね、未知の分野をやるってことが、その人間に力をつける。未知の分野にアタックする方法を学ばなければいけない。社会に出たら、既知の分野ってないんだよね。困ったなと思ったとき、解決法は自分で作り出していかなくちゃいけない。それを練習する場が大学なんだ。

吉田：総合科学部が果して専門性を持つべきなのかどうか、考えてみれば、専門性を持った学部がまわりにあるわけだから、1つくらい専門性がまったくない、僕はそうあって欲しいんだけど。僕が2年程前に他学部の人と話したときに言ったんだけど、総合科学部は、知識のレジャーランドにしてしまおうと。あの、東千田のときにはそばに放送大学があったから、タイアップして何かできないかなと考えてて、まあ、セミナーとかは教

授と話合っただけじゃいけないうけど、一方的に聞くなら、ビデオ教材でいいじゃないかと思うんだけど。

谷淵：でもそれでは大学としてのアイデンティティを保てなくなりませんか。やはり総科の目指すものはカルチャーセンターと同じであってはならないと思う。榊原さんがおっしゃったように、知識の寄せ集めは決して学問にならないんじゃないですか。大学は学問をする場所であって、カルチャーセンターなら、カルチャーセンターに適した場所があるじゃありませんか！



今回の座談会では、総合科学部というものに対する疑問や、学生生活や講義などに関する具体的な不満などが出た。これらのうち、制度に関わるものは質問あるいは提案というかたちで、コース委員長の稲田教官と相談した。以下の文は、その内容を、飛翔委員がまとめたものである。

Q. それぞれの講義内容が、将来的に何に役立つかわからないのでやる気が起きない。

A. 「役に立つ」ということが実利的な効用を持つという意味であるとすれば、特に教養的教育の科目の場合は、「この講義は将来これこれに役立つ」などと説明することは難しい。ただ、ある講義が、他の講義とどのような関連を持つのかがよくわからないという意味であるとすれば、新カリキュラムでは人文・社会・自然等という分野区分がなくなったので、ある程度無理もないと思われる。類似の教科目を組み合わせるというパッケージ案もあるが、まだ実施に至ってはいない。履修がいわば自由化されたのだから、自分の興味にまかせて授業を選択するというのもひとつの方法である。

Q. 今の聴講期間と、期間中の授業のやり方では、本当に受けたい授業を見つける事が難しい。

(・聴講期間が短い。・1週目は授業をせず、簡単な説明だけで終わる。)

A. 2週間という聴講受付期間を置いているのは、学生が本当に受けたい授業を見つけるための措置の一部である。1週目から授業をするのは当たり前の事であり、聴講受付表をまわして簡単な説明だけで終わるのは教官の怠慢である。しかし、大学側の講義に関する情報提供が十分でないという点は否めないで、来年度から「講義概要」をさらに充実させ、できれば、講義の目的、内容、方法、参考文献、評価方法を明示した「シラバス」を作成したいと思う。

Q. 必修というものに押しつけを感じる。ガイダンスなどの指導だけ行い、後は、学生の自主性に任せてみては？ 日本の大学は、単位が多すぎるのでは？

A. 「必修」は大学側の教育的配慮であり、それなりの意義はあると思うが、必修科目が学生の関心と一致しないときは、確かに押しつけのように感じられるだろう。新カリキュラムでは、必修科目は減ったはずである。「単位が多すぎる」という点も、新カリキュラムでは卒業に要する単位は12単位も減っている。問題は、1・2年の時にあまりにも多くの授業を取りすぎる事にある。今年から制限単位を撤廃した事が、学生の過密スケジュールを招いたのかもしれない。履修は、授業科目の内容や難易度をよく考えて、4年間にわたって適切になされるべきである。

*制限単位：1年次には1期に22単位程度しか履修することはできないという、前年度まで実施されていた制度。

Q. 一方的な講義型授業が多すぎるのでは？

A. 個々の授業によって差はあるが、教養的教育の講義科目では、学生の発表や討論が少ないのは事実だ。その原因として、大学入学以前の教育の方法や、大学側の授業の工夫の不足などをあげることができるだろうが、小人数、討論形式の授業を実施することは、現在の大学教育に課せられた緊急の課題のひとつであると認識している。このため、総科生全員の必修科目「総合ゼミ」を引き続き検討中である。

Q. 今のコースガイダンスは十分だろうか？

A. 1昨までは、8月の終わりに1泊2日のスケジュールで、コース選択ガイダンスをおこなっていた。しかし、昨年春、春の新入生オリキャンを学部単位で行うことになったこともあって、泊まりこみのガイダンスは廃止された。昨年の第1回コースガイダンスは、第1会議室で、各コースが相談コーナーを設けて個別に相談にのるという形式をとったが、今年度は、2日間にわたり、1コース1教室を割り当て、全体説明と個別相談を行うというやり方によって行った。第2回コースガイダンスは、来年1月頃、ほぼ同様の形式で行われる予定である。泊まりこみのガイダンスを復活させることは、経費等の関係で難しいと思われるが、コースガイダンスに関して、要望やアイデアがあれば、寄せて欲しい。

Q. コース選択またはゼミ選択の際の情報として、教官へのアンケート（研究内容などについて）をいつでも見られるように常設して欲しい。また、各研究室に教官の執筆者や、関連雑誌を設置して欲しい。

A. これについては、なんら支障はないので、各コースに実行を依頼した。「教官へのアンケート」の常備場所も、コース学生研究室が適当であると思う。

●終わりにあたって●

無事座談会も終わり、学生の意見・声をこの場に掲載することができ、嬉しく思う。意見の交換、議論は十分であったかどうかは疑問だが、とりえず自分たちをみつめるきっかけになったと言えよう。座談会で出た「不満・要望を聞くところを設けてほしい」という意見を踏まえ、飛翔で「目安箱」のようなものを設置してはどうかという提案もある。また、今回いくつかの不満に対してコース委員長からすぐに改善案が提示されたことは、今回の収穫の一つと言えよう。不満や疑問を提出することは無益ではないのであるから、食堂の行列やあふれかえるごみ箱、サークル活動についてなどなど、諦める前に考えてみませんか。

【そうか！フレンドシップキャンプ】

今年も広島市野外活動センターで第2回総科フレキャンが開催された。今回は前年と異なり、1泊2日の日程であったが、好天にも恵まれ、まずまずの成功であったと思われる。

フレキャンの意義等については、さまざまに議論がなされているが、基本的には新入生を受け入れるためのキャンプであることは間違いないであろう。教官にとっては新入生を受け入れる機会はいくつもあるが、在校生にとってはフレキャンが、新入生を迎え入れる貴重な場である。在校生が新入生を受け入れるというフレキャンの役割は、温かく迎え入れた新入生が翌年自分達もまた次の新入生を温かく迎え入れたいという多勢のスタッフの出現となって示されている。教官としては総合科学部在籍生の新入生に対するそういった情熱に水をかけることなく温かく見守っていききたいものである。



新たなる目標に向かって

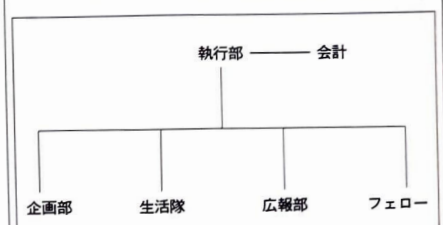
〈学生スタッフ代表〉 芝 宏治 (生体行動科学コース4年)

去る4月30日、5月1日の2日間、総合科学部の新入生オリエンテーションキャンプ(通称フレキャン)が行われた。一昨年度をもって宮島での全学オリキャンが廃止になってから、学部独自のキャンプとしてはまだ2回目である。新入生からの感想は、概ね好評のようであったが、自分としては合格点をつけることが出来ない。まだ2回目ということで改善の余地が多いということもあるが、前回のオリキャンとついつい比較してしまうところも大きい。前回は何の手本もないゼロからのスタートであり、ある意味で大バクチのキャンプであったが、いざ蓋を開けてみると大成功であった。立場は違えど前回はキャンプをつくる側のスタッフとして参加していたが、参加者からは見えない裏の事情まで今回との比較を行い、その度、前回のイメージにとらわれてしまった。今年の新入生をオリキャンという形で「歓迎しよう」と自主的に集まった学生スタッフの9割は、昨年度のキャンプでは「歓迎される」立場であった05生であった。彼らには私とは逆に、前回のキャンプの

イメージにはとらわれず、自分達の新たなキャンプを創って行こうという姿勢が少なからず感じられた。それが全て良いというわけでもないが、「歓迎される」から「歓迎する」という自主的な立場の移行が、各人に何らかの自律を生み出したことに間違いはないと思う。大学に入学したとたんに目標を失って燃え尽きてしまうような大学生に対し、このキャンプがカンフル剤的な役割をはたし、「次は自分達の手で」という新たな目標を設定させる。たとえそのキャンプが終わっても、自らの手で1つの大きな理想を具体化することを真に学んだ者は、また新たな目標を設定し、先へと進んで行くことが可能であると思う。そう思うと、オリキャンは決して新入生のためだけのものではない。一仕事終えたスタッフ、フェローのみんなには、この経験を大事にして欲しい。キャンプに参加してくれた新入生のみんなには、今年イメージは捨てて、自分らの手でもっと素晴らしいキャンプを創って欲しい。楽ではないが、間違いなく得るものはあると思う。

フレキャンスタッフの組織構成

- 11月
 - ・スタッフ募集開始
 - ・週2回の会議開始
 - ・3つの部所(生活、企画、広報)に分かれる
 - 12月
 - ・教官との会議(第1回)
 - ・教官との会議(第2回)
 - ・スタッフ親睦会
 - ・第1回親睦合宿
 - 1月
 - ・野活センター下見(生活)
 - ・全学部会議
 - ・スタッフジャンパー、フェロージャンパー デザイン開始
 - 2月
 - ・フェロー活動開始
 - ・キャンプ講習会
 - ・レクリエーション講習会
 - 3月
 - ・教官との会議(第3回)
 - ・ファイヤーリハ
 - ・野活センター下見(企画、広報)
 - ・リハーサルキャンプ
 - 4月
 - ・ジャンパー完成
 - ・新入生との顔合わせ
 - ・教官との顔合わせ
 - 5月
 - ・キャンプ本番
 - ・キャンプ反省会
 - ・キャンプ写真販売
 - 6月
 - ・教官との反省会
- to be continued



執行部：原案作成、学校との渉外を担当。各係の責任者により構成。

企画部：各企画の立案・進行を担当。

生活隊：キャンプ生活全般の管理・参加者の健康管理・安全対策を担当。

広報部：広報活動・情報管理を担当。

フェロー：各生活班の班長。キャンプ当日の活動全般の指導。

会計：会計管理を担当。

企画座

中川 昇 (数理情報科学コース3年)



キャンプ当日に行われた、キャンプファイヤー、オリエンテーリング、運動会といった企画を担当していたのが我々企画座です。初めの頃は、「自分には企画を立てる才能なんてないからダメ」という人もいました。しかし、「ダメだ」なんてことは全然なく、みんなで考えて、楽しく企画ができました。2月中旬頃から段々と忙しくなり、いろいろな小道具の製作やリハーサルに追われたこともありましたが、基本的には、「みんな一緒に楽しく」やってくれたので、企画座をやった良かったと思います。

広報(ウォーズマンズ)

河野 斉治 (自然環境研究コース2年)



「広報」というと、一般に堅いイメージであるが、最初に「ウォーズマンズ」(漫画のキャラクターで常に「コーホー」と言っている)の呼称になった時点から、それはなくなった。新入生への募集要項や、様々なパンフレット、ポスター等々、毎回遅くまで作っていた。そういうものは自由に作れたし、大抵のことは予想以上に好きにやれた。極めつけは、キャンプの宣伝のため新入生に誰よりも早く会えたことだった。また、ウォー企画として、「フレキャンメール」や、「幸せの人形」などもやったりした。当日は救護役として寝ずの番をしたりと、仕事は大変だが、それらをこなしつつも、いい意味でのやりたい放題であったと思う。